

# 史料紹介 『蓮如上人山科実記』

安 藤 弥

はじめに

ここに紹介する史料は『蓮如上人山科実記』と題する書物で、その識語によれば、文政三年（一八二〇）に釈山なる僧侶が記したものである。歴史的課題としては、たとえば「江戸時代の真宗僧侶が見た蓮如と山科」といったテーマが導き出される内容を持つ。日本近世の知識人僧侶による歴史研究と史跡顕彰の一事例を示す史料として位置付けられるであろう。

また、真宗史においては戦国時代に蓮如（二四一五―一九九）が洛外山科（現京都市山科区）に再興させた本願寺とその後、段階を経て蓮如の次代実如（二四五八―一五二五）期に形成されていく山科寺内町に関する参考史料としても貴重である。山科本願寺とその寺内町は文明十年（二四七八）蓮如によって造営が始まり、実如の孫証如（二五一六―一五四）期の天文元年（一五三三）攻撃を受けて焼失した。その後、本願寺は摂津大坂（現大阪府中央

区)に移転し、山科に戻ることはなかった。山科には蓮如廟や実如、円如(実如息男・証如父)、証如の墓所などが残り、江戸時代には東西本願寺の掛所(御坊。現在の東西山科別院)が設けられたが、本願寺・寺内町の遺構(堀や土塁など)は次第に風化し、近代には開発による破壊もされつつ、現在に至る。歴史文化財としての遺跡保存活動によって、土塁の一部と蓮如隠居跡南殿遺跡が国史跡に指定されたのは二〇〇二(平成十四)年のことである。

本書は、文政三年段階で山科を実際に歩いた了山なる真宗僧侶の著作である。もちろん江戸時代後期に記された書物であるから、その内容を戦国時代にただちに遡及できるわけではないが、戦国時代の史料に拠ったとみられる内容が記されていたり、他の史料にない貴重な情報(たとえば文政三年当時の様子を示すとみられる絵図面など)が提示されていたりして、本書の史料的价值はあなどれない。管見の限り、これまで本書の内容が紹介されたことはないようであるので、研究に資するため、ここに全文の翻刻に絵図面も付して紹介することにした。繰り返しように、①近世真宗僧の学問的営為を示す史料として、また②中世の山科本願寺・寺内町に関する参考史料として、本書は重要なものである。

底本には慧光寺(大阪市平野区)所蔵本を使用した。ご許可いただいた慧光寺住職近松誉氏に深く感謝申し上げます。この慧光寺本はかつて筆者が参加させていただいた慧光寺所蔵史料調査において見出されたものである。これまで、大谷大学図書館所蔵本が知られていたが、大谷大学本は「大谷派本願寺」の罫紙に記されたもので、近代の写本である。それに対して、慧光寺本は書写文言を持たず、「釈了山」の署名と花押を付すので原本の可能性もある良本である。現蔵に帰した経緯は不明であるが、表紙右下に「粟津/蔵書」の朱印があり、筆者の了山は蓮如隠

居所旧跡の南殿光照寺（京都市山科区）の歴代に数えられる。<sup>①</sup> 後考を期したい。

〔翻刻凡例〕

- ・原則として旧字を新字に改めた。明らかな誤字でもそのままにした。
- ・「ち」（より）、「ゞ」（して・しめ・せて）、「比」（とも）、「伝」（と云）は適宜改めた。
- ・適宜、読点をふった。割り書きについてはへゝで示した。
- ・原文にあった振り仮名、返り点は省略した。
- ・原文の改行については、追い込みとした。逆に段落を意識して適宜改行をかけた箇所もある。

〔表紙〕

（右下）朱印「粟津／蔵書」

（左上）「蓮如上人山科実記上」

〔表紙裏〕

「乍恐、右之書二卷、三ヶ年已前より相掛り、漸々当年成就仕候間、山科蓮如上人より証如上人迄御三代五十二年之間之美記無御座候二付、数多蓮如上人様之事書候書物拜見仕、其実年代合、以墨、急あら／＼奉書候」

蓮如上人山科実記

釋了山謹テ考記

抑、蓮如上人山科へ御本山御建立ノ御時代ハ、文明十年御年六十四歳ノ正月中旬ニ、河内国出口村光善寺ヲ御出立アソハサレ、当所山科へ入ラセラレへ是事、帖外ノ御文ニ卷目ノ五十三ノ右ト同五十四ニモアリ、其翌年文明十一年春ノ頃ヨリ一字ノ坊舎ヲ興行シ玉ヒ、同十二年へ庚子ノ二月始コロヨリ御影堂御柱立、同十月中旬ニ御成就、霜月十八日ニ、大津三井寺へ御アツケアソハサレタル祖師聖人ノ御木像ヲ、御影堂へ御移シアソハサレタリ、是事、山科御建立御満足ノ御文ニ明ナリ、右ノ御文、山科へ泉水山南殿光照寺東、西ノ村鶯放山西宗寺西へ右両寺、三月九月廿四日ニ拜読スルナリ、御直筆也、則山科ニ御本山御建立御満足ノ御直作ノ御木像六十六歳ノ御時ナリ、右ノ御木像ハ、唯今山科東御坊所ニ御安置ナリ、然レハ文明十年ヨリ延徳元年迄、凡ソ十一ヶ年ノ間御住職ナリ、唯今東西ノ御坊所ノ向ノ空地、古へ御本山ノ跡ナリ、右ノ御地面ハ人皇四十九代光仁天皇宝龜元年ノ頃ヨリ弘仁年中ノ頃迄田村將軍ノ御城ナリへ田村將軍山科ノ事ハ、小町行状記ニ有、其後、彼地へ大和国ヨリ山階寺ヲ引勅願所トカヤ、乱世ニ焼失スルトへ是山階寺ノ事ハ、古キ人ノ申伝ヘナリ、依テ爰ニ顕ス、其後、足利將軍ノ幕下老海名遠江守ノ城ナリ、遠江守没ツ落シテ老海名五郎左衛門ト名乗り彼地ヲ所持トカヤへ西ノ村西宗寺、右ノ老海名ノ隠居所ナリ、時ニ蓮如上人大谷ニ在シテへ大谷本願寺ト申ハ、唯今京都東山知恩院ノ地面是ナリ、其時ハ知恩院ハ山手ニアリ、小坊ナリ、御年十五歳ノ御時ヨリ、五十七才応仁二年四十二年ノ間、御化導、誠ニ乱世ノ時分ナレトモ、御繁昌前代未聞トナリ、

蓮如上人御年五十七歳ノ御時ニハ、新法主順如上人二十七歳ナリ、其年蓮如上人御隱居ノ義仰出サレシトナリ、然レトモ順如上人御病身故御辞退アソバサレシトナリ、是非ナク蓮如上人御住職アソハサセラレ、御教化アラセ玉フ

ニ、応仁ノ大乱ノ中ニ益々御繁昌盛ナリ、依之、時ノ天子後土御門院御感応アソバサレ、仏法繁昌ハ天下安全ノ瑞相ナリトテ、文明元年ニ、日ノ御門・月ノ御門ヲ蓮如上人へ給ル然ルニ、文明二年春彼岸迄ニ大谷ニ勅免ノ御門ヲ御成就アラセラレケル、尔ルニ山門ノ大衆ノ辺執ニ依テ、五百人ノ大衆来リ、一時ノ間ニ御本山ヲ焼亡ス（是事、末書ニアリ、今ハ略ス）、夫ヨリ江州金森三井寺（是事モ諸記ニ明ナリ、今略ス）、文明三年ニ祖師聖人ノ御木像ヲ三井寺へ御預ケアソバサセラレテ、越前国へ御下向、吉崎御坊御建立（右吉崎御坊御建立ノ奇瑞・不思議御繁昌ハ、末書ニ有、今略ス）、先ツ吉崎御逗留在ス間ニ御製作ノ御文ハ、一帖目十五通・二帖目十五通・三帖目初通ヨリ十通適合せて四十通ノ御文（其外帖外数通）、神明六ヶ条ノ御文ニ文明七年七月十五日トアリ、越前吉崎ニテ御文御製作ノ最後ナリ、其年ノ秋、吉崎ヨリ若州小浜（吉崎御退出ノ事ハ、書記ニアリ、下間安芸法印、浅倉ト諍論ノ事）ニ入セラレ、丹波ノ山中ヲ越サセラレ、河内国出口村へ入セラレ、其年報恩講出口村光善寺ニテ御執行、則七昼夜、初迄夜ニ三帖目毎年不闕ノ御文御製作、文明七年十一月廿一日トアリ、文明八年正月廿七日ニ、抑古へ近年ノ御文、同年七月十八日ニ、夫当流門徒中ノ御文、文明九年正月八日ニ、四帖目ノ最初ノ御文、同年九月十七日ニ、夫人間ノ寿命ヲカソウレハノ御文、同月廿七日ニ、夫当時世上ノ御文（※頭註「御俗姓ノ御文ハ、文明九年ナリ、則出口ニテナリ」）、同年十二月二日ニ、三首御詠歌、仏照寺御教化ノ御文、是ミナ出口光善寺ニ三年御逗留ノ間ニ御製作ナリ、故ニ帖外ノ御文ニ、出口ノ草坊三年ノ春秋ヲ送ルトノ玉フナリ、時ニ御歳六十三才ナリ、六十四歳文明十年ノ春ノコロ、山科へ金ヶ森道西坊ノ御按内申奉リ（是事、諸記ニアリ、金ヶ森縁記等ニモアリ、今ハ略スルナリ）、

蓮如上人六十四歳ノ真蹟ニ云、

文明十年孟春下旬ノ十日頃、河内国出口邑ノ中ノ番ト云所ヨリ上洛シテ、宇治ノ郡小野ノ莊山科野村西中路ニ住所ヲ構ヘテ、其後程ヘテ先新造ノ馬屋ヲツクリ、其年ハ春夏秋冬イクホトナクウチクラシヌ、尔レハ愚老カ年齢ツモリテ今六十四歳ソカシ、

又次ノ文ニ、ホトナク明ルアシタ、初春ニモナリヌ、正月十六日ニモナリシカハ、春アソヒニヤトテ林ノ中ニアルヨキ木ノ松ヲホリテ庭ニウヘヌ、地形ノ高下ヲ引直シナントしてスキユクホトニ、三月初頃カトヨ、向所ヲ新造ニツクリ立テ、其後ウチツ、キセ、リ造作ノミニテ、四月初頃ヨリ、摂州和泉ノ堺ニ立置シ古房ヲトリノホセ、寢殿マ子カタニ作りナシケルホトニ、トカクシテ同四月廿八日ニハ早柱立ハシメテ、キノフ今日トスルホトニナンナリ、八月頃ハカタノ如ク周備ノ体ニテ、庭マテモ数奇ノ道ナレハ、コト／＼クナケレトモ作りタケル、

又次ノ文ニ、冬ノ頃ニ至ルマテ、普請作事ツイシ等ニ至ルマテ、皆々心ヲツクセシコト、予今思出スニ、ミナ夢ソカシ、

右、堺ノ古房ヲ御トリヨセ玉フニ、御取持ノ人ハ、堺ノ道頭・金ヶ森道西・勸修寺道徳・山科海老名五郎左衛門・同所粟津作治良元道・百貫孫右衛門・中川勘解由トナリ（是事古キ書ニアリ）、

偕、右ノ御言ト、西宗寺・光照寺ノ両寺ノ宝物、御建立御満足ノ御文ト、年代次第セリ、

御文ニ、シカレハコノ在所ニヨヒテ、イカナル宿縁アリテカ、不思議ニ、文明第十ノ天春下旬ノコロヨリ、カリソメナカラ居住シテ、一宇ノ坊舎ヲ興行シ、ソノマ、相統セシメ、ツキノトシ文明十二年（庚子）二月ハシメコロ、

御影堂ヲカタノコトク、柱立ハカリトコ、ロサストコロニ、ナニトナク仏法不思議ノ因縁ニヨリケルカ、諸国門徒中アマ子ク懇志ヲハコハシムルアヒタ、程ナク造立シテ、ステニ霜月十八日ニハ、コノ十箇余年ノアヒタ大津ニ御座アリシ御影像ヲウツシタテマツリヌ、ツラ／＼当寺濫觴ノ由来ヲ案スルニ、コトユヘナク速疾ニ建立成就セルコト、サラニモテ凡情ノクハタテニアラスヤトオホヘハンヘリ、コトニハ、予身上ニヲヒテ本懷満足ノイタリ、ナニコトカコレニシカンヤヘ略ス、

右、文ノ御写シヲ、山科東西ノ御坊所ニテ、三月（廿四日ト）九月（廿四日ニ）拝読アラセラル、ナリ、右御文文明十二年十一月廿一日ニ御製作ナリ、然レハ文明十二年正月上旬ニ、御影堂御柱立、霜月上旬迄ニ、御本堂・御影堂・御殿・ツイジ・御門迄、不殘御成就アソバサレ、大津三井寺ニ御アツケアラセラレタル御木像ヲ御迎アソハサレ、霜月報恩講御執行ナリ（右御木像ヲ御向ニ付テ、三井寺より難題御心配ノ事ハ、諸記ニアリ）、

文明十三年ニ御隱居ノ義仰出サレラレシトナリ、然ルニ御新門順如上人御病氣ニテ御住職モ出来カタク、則チ文明十五年五月廿九日御歳四十二才ニテ御往生ナリ、蓮如上人御愁歎アソハサレテ仰ニ、成仁ノ子ニ別レタルホトノカナシキ事ハナシ、タヨリナキモノナリ（実悟覚書ニ有）、夫ヨリ蓮如上人六年ノ間御住職ナリ、

時ニ文明十五年霜月報恩講ニ、抑当月ノ報恩講ハ開山聖人ノ御遷化ノ正忌トシテノ御文、文明十六年十一月廿三日、八ヶ条ノ御文御製作ナリ、実ニ祖師ノ御再来又阿弥陀如来ノ御化身成故ニ、開山聖人ノ御遷化ノ御文ニ、一、山科本願寺御影へ参詣ト仰ラルヘキニ、一、京都本願寺御影へ参詣ト仰ラレタリ、是誠ニ御往生ノ后、十代目証如上人ノ御代、実如上人御遷化ヨリ八年目、下間筑前ト下間源七郎・八木藏人此等ノ人々、証如上人御幼少ナルニヨリ、

諸勢ヲ執事スルニ、源七郎ハ出頭オトリ万事筑前相ヒハカラウ事ヲ憤リ、意趣深クシテ江州ヘ下リ、他山ノ僧衆ト同心シ、表向ハ勸音寺ノ城主佐々木ト見セカケ、七百余騎ノ猛勢ヲ引率シ、山科神无森ニ陣ヲ取テ、音羽南殿泉水山ヲウバイトリ、御本廟ヘ向戦ハシムヘ是事、諸記ニアリ、今ハ略ス、是依、証如上人、宇治田原ヘ夜通ニ落サセラレ、夫ヨリ摂州大坂御坊御本山トナリ、暫ク大坂御繁昌ナリシニ、十一代目頭如上人ノ御代ニ、信長ノ為ニ紀州ヘ御転地在テ、其后、京都ニテ御本山不退転ナルヲ兼テ御存知アラセラレシ事明ナリ、誠ニ御未来記ノ通ナリ、一、蓮如上人山科ニ在テ、帖外ノ御文数通、又大津・山科両所ノ不法義御イマシメノ御文、御法話、御一代聞書ノ御教化等、大略ハ於山科ノ事ナリ

文明十九年ニ長享ト年号改ル、長享三年目ニ又延徳ト年号改ル、延徳元年ニ実如上人御年三十二才ニナリ給フ、則本願寺御住職ヲ実如上人ヘ御譲リアソハサレ、御隠居ノ思召有セラレテ、延徳元年ノ春ノ頃、野村ノ東迄ヲ御順見アラセラレシトナリ、

凡蓮如上人御一代ノ伝ハ、蓮悟尊ノ遺徳記、実悟尊老ノ覚書ニ依テ、是ヲ本トシテ、末書ヲ見スンバ、其誤リ多シ、順如上人・実如上人御蓮子方ノ誤リ多シ、故ニ今コ、ニアラハス、  
蓮如上人十三男十三女ノ御子御在ス、

△第一男 光助、法名順如、公名中納言（唯称院左大臣勝光公ノ猶子）、御官位法印権大僧都ナリ、青蓮院尊応法親王ノ門侶ニテ在ス、御母公ハ下総守平貞牧ノ息女也、

△第二女子 常楽台光真ノ内室、法名如慶ト号、



- △第三男子 左衛門督三位卜号、法名蓮乗、(瑞泉寺・本泉寺)兼任ニテ在(此事、顕誓法師ノ反古裏ニアリ)、
- △第四女子 出家在テ法名見玉卜号(棋受庵見秀ノ弟子ナリ)、
- △第五男子 兼祐、法名蓮綱、法印権大僧都ニテ(華開院女誓ノ弟子ナリト申、後ニハ松岡寺北隣坊ト申)、
- △第六女子 出家シテ寿尊ト申、見玉ノ弟子ナリ、
- △第七男子 康兼、法名蓮誓、公名ハ三位 法印権大僧都ニテ光敬房とも光闡房トモ号(反古裏ノ撰者ハ、此康兼第三男兼順ナリ、法名顕誓ト号セリ、光闡坊ヲ相統セラレタリ)
- △第八男子 光兼、法名実如、童名光養丸、公名大納言、御母ハ藤原中納言永継卿ノ息女ニテ、唯称院左大臣勝光公ノ猶子トシ玉フ、法印権大僧都ニテ教恩院ト号ナリ、
- △第九女子 左京大夫ト申、將軍慈照院義政公ノ侍妾ニテ、唯称院右大臣勝光公ノ猶子トシ玉フ、法名妙宗ト申ナリ
- △第十女子 興行寺蓮助室ナリ、
- △第十一女子 白川中将資成ノ内室トナリ玉フ、
- △第十二男子 兼誉、法名ハ蓮淳、公名ハ三位、法印権大僧都、顕証寺ノ開基ナリ、
- △第十三女子 法名了古ト申、
- △第十四女子 瑞泉寺蓮欽内室トナリ玉フ、法名了如、
- △第十五男子 兼縁、兵衛督ト号、法名蓮悟、法印権大僧都ニテ蓮如上人遺徳記ノ作者ナリ、
- △第十六女子 中山中納言宣親卿ノ内室トナリ玉フ、法名祐心ト号、

△第十七女子 願行寺勝恵ノ内室トナリ玉フ、法名妙勝、雅名梅ト申、此墓所（伏見ノ美濃ト云処ニ梅塚ト号シテ今ニ有ト申伝ナリ）、

△第十八女子 超勝寺蓮超ノ内室トシ玉フ、法名蓮宗、

△第十九男子 兼琇、蓮芸、公名二位、教行寺ト号、

△第廿 女子 勝林坊勝恵ノ内室トナリ玉フ、法名妙祐、

△第二十一男子 兼照、法名実玄、慈教寺、権律師、公名ハ宰相、

△第二十二男子 兼俊、法名実語、公名中将（蓮如上人御一代ノ御法語、覚書ノ撰者也）、実如上人第四男本宗寺

実円法印ノ養子ナリ玉フ伝説有リ、

△第二十三男子 兼継、法印権大僧都、法名実孝ト申、本善寺ト号、公名侍従、

△第二十五女子 常楽寺光恵ノ内室、

△第二十六男子 兼智、法印権大僧都、順興寺ト号、法名実従、

右、廿六人在ス、第一男光助法印ニ寺務職ヲ譲リ玉フ、然ルニ光助順如上人御望无シ、殊ニ御病身故辞退、次ニ文明十五年五月廿九日四十二才ニテ御往生、夫迄ニ御蓮子方外々へ御カタツキアソハサレタリ、第七男光兼公迄御先腹ノ御蓮子ナリ、実如上人ハ、永継卿ノ息女ノ御子達ノ中ニテ御惣領ナリ、第七男光兼公迄ノ内、御世相続アルヘキ事ナレとも、ソレマテニ不残御カタツキ済タル故ニ、後ノ公様ノ御相領実如上人才器秀玉フ故ニ、第九代ノ寺務職ト崇敬シ奉ル、則蓮如上人御置文ニ通有之ト左ノ如シ、

讓与大谷本願寺御影堂御留主職之事

右、件ノ住持職者、去ル文正ノ頃、俄ニ光助法師ニ申付、既ニ讓状与之訖ヌ、雖然、其身、无競望之間、重テ光養丸ニ、所讓与実正也、但シ、就法流、无沙汰之子細有之者、於兄弟中、守其器用、可住持者也、次ニ兄弟為大勢之間、无等閑、可有扶持者也、若此条々相背其旨者、永可為不孝者也、仍而讓状如件、

応仁二年（戊子）三月廿八日 蓮如御判

（右ノ御讓状ハ於大谷ナリ、然レとも順如上人御望ナキ事、并二年号御門言等ニテ能々可勘弁者也）

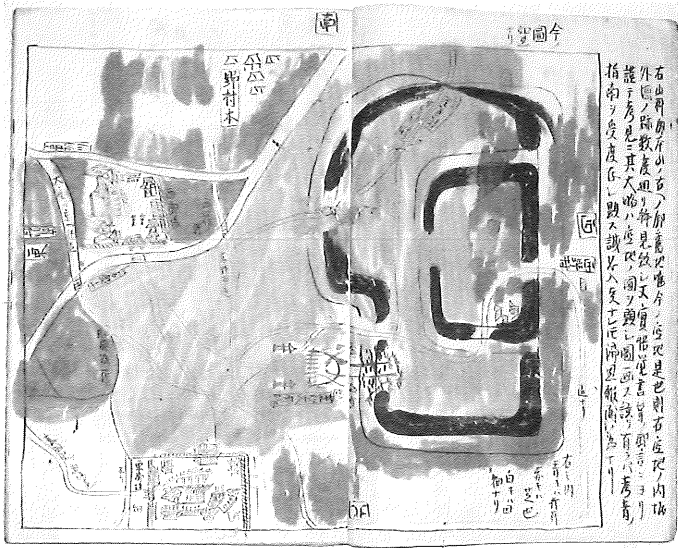
大谷本願寺御影堂御留主職事

右、件ノ御留主職者、任代々例、早可管領者也、但、就法儀、非儀之子細有之者、兄弟中守器用、可住持者也、次ニ男女少兒之兄弟多之、愚老如在生之時、不相替、可扶持者也、若背此等之旨者、永可為不孝者也、仍而讓状如件、

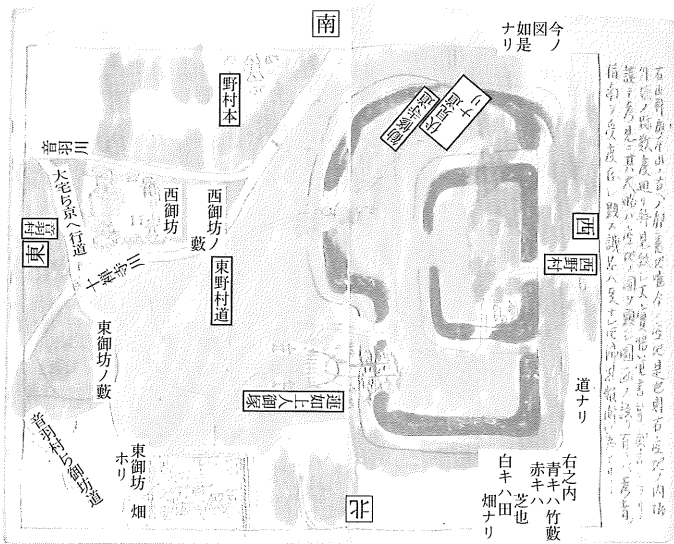
延徳二年十月二十八日 蓮如御判

右ノ御讓状ハ、正ク延徳元年泉水山へ入セラレ御隱居ナレとも、尚後代ニ彼是无之様上ニ顯ス、如御兄弟多キ故ニ、延徳二年十月廿八日ニ、如右、御直筆アソバサレタリ、

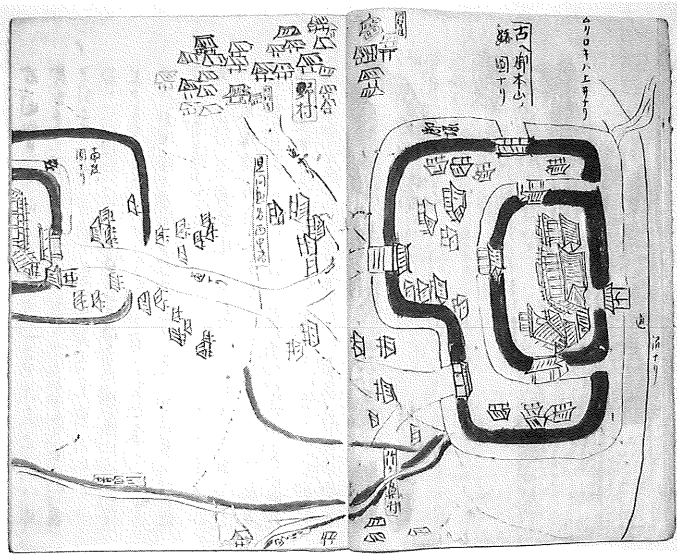
右、山科御本山ノ古ヘノ御旧地、唯今ノ空地是也、則右空地ノ内堀・外堀ノ跡、数度廻リ拝見致シ、又実悟覚書等ノ御言ニヨリ、謹テ考見ニ、其大略ハ空地ノ図ヲ顯シ図画ス、誤リ有ラハ考者ノ指南ヲ受度存シ顯ス、誠恐人事ナレとも仏恩報謝ノ為ナリ、【図1・2】



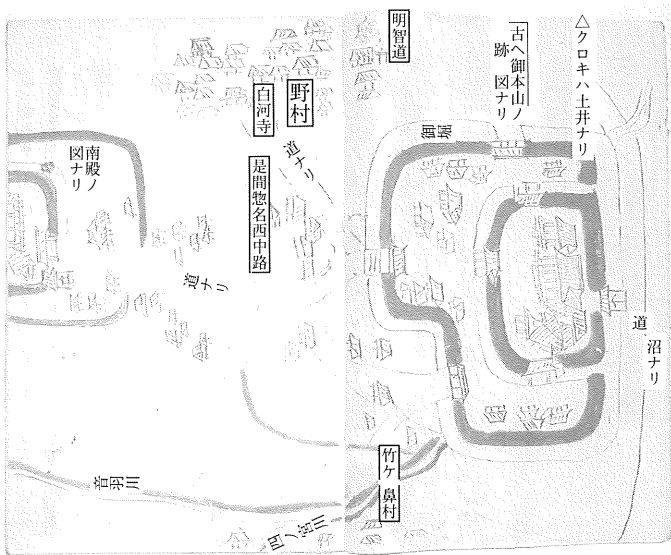
【图 1】〔文政山科繪圖〕



【图 1】〔文政山科繪圖〕（文字翻刻）



【図2】 [推定山科本願寺図]



【図2】 [推定山科本願寺図] (文字翻刻)

右ノ図如是ナリ、問、三百年ノ古ヘノ事、天文元（壬辰）八月御焼失、三百年來焼野ノ原トナル、然ルニ右ノ如クノ図ヲ引事、以何して知ルヤ、答、先御本堂東向と云事ヲ知ルハ、河内国願得寺ノ実悟覺書ニ曰、蓮如上人御往生アラセラレテ、御尊骸ヲ曲録ニ乗セ奉リ、念珠助老ヲ持セ奉リ、御影堂ノ南ノ方ニ御直シ奉ルニ、祖師聖人ノ御尊ガンニ少モ違事ナシトアリ、然レハ御本山御先代ヨリ御影堂ノ御莊嚴ハ、真中ニハ祖師聖人ノ御木像様、右ノ方ニ前住上人ノ御影ヲ奉掛、左ノ方ニハ前々住上人方ノ御影ヲ掛玉フカ古例也、今モ其通、尔レハ御影堂ノ南ノ方トアレハ、其トキハ存如上人ノ御影、右ノ方ナレハ北ナリ、故ニ先蓮如上人御尊骸ナレハ、南ノ方ナヲシ奉リ、諸人拜礼御免アラセラレタリ、然レハ御本堂東向と云事明カナリ、

二二ハ、蓮如上人ノ御時代ニハ、乱世ノ最中ナレハ、越前吉崎又ハ大坂石山ミナ城構ヘニ要害アソハサレシナリ、吉崎ノ山上、多屋ノ跡、四方ノ要害、可見、大坂ハ秀吉城ニキツキシガ、古ヘ則城構ヘナリ、況ヤ、山科ハ古ヘ田村將軍ノ城跡ナル、其跡又遠江守ノ城ヲカマイシ跡ナレハ、其要害甚宜、何レ城ハ表ヲ嚴重ニスルナリ、殊ニ三百年ノ昔ハ、山科七ヶ郷ニテ、先北ハ御陵村、天智天皇ノ御廟ノ下ヨリ、南ハ勸修寺村迄、大沼ナリ、シツ川（三井寺山ヨリ流ル、）・十禅寺川（逢坂ノ関ヨリ流ル、川）・音羽川ハ、四ノ宮村ノ堺ヨリ、竹ヶ鼻ヘ流レテ、右三川、不殘右ノ沼ヘ流入テ、今ノ西宗寺ノウラヨリ花山村迄、東西四丁余、南北一里程、洪谷階道ノ造道バカリニテ、ミナ沼ナリ、野村ト申スハ、今ノ東野村トナリ、然ルニ其後チ、彼ノ古ヘ御本山ノ御旧地ノ西ノ方ヘ、野村ヨリヲイ（）人家造リ出シ、西宗寺モ出来、人家モ次第ニ出来テ、野村ノ西ナル故ニ、西野村ト申スナリ、然レハ、蓮如上人ノ御時代ニハ、西ノ村ハナシ、御本堂ノウラ、大沼ヨリ暫ク二十間程スキテ、堀ヲ深く指シ渡シ、十間程土井高

サ五間八間程（今ニ如在ナリ）、然レハ裏ハ沼アル故、堀土井一筋ナリ、前ノ方ハ堀土井二筋ナリ、前ニ顯ス図ノ如ナリ、然レハ御本堂東向ナリ、

三八、昔ヨリ寺院仏閣ハウシロニ山カ川カ林ヲトリ、在所ノ方ヘ向ケルナリ、然レハ西ノ方ハ一面ノ沼ナリ、東ハ音羽村又御本堂ノ東南ヘ寄依テ、野村東北ヘ寄テ、竹ヶ鼻村・四ノ宮村・安朱村（真言弘法ノ正流ヲ伝ハラレタル寺ナリ、今高野ニテ安祥寺流ト申テ大切ニスル正流ナリ、是安祥寺今高野ノ隱居所トナレリ）、東南ニ大宅村・小野村・宇治辻数々在所アリ、南ニ勸修寺村等アリ、尔レハ沼ノ方ヘ御本堂向玉フ道理ナシ、則東ノ方向玉フ事明ナリ（可考）、

誠ニ六歳ノ御時、御母公石山ヘ御帰アラセラレシトキノ御遺言アラセラレ、夫ヨリ是方、余念不在、唯真宗興行ノ御志、頻リニ在テ、十五才ノ御時ハ、一宗ノ中絶セシ事ヲ悲思召テ、我一代ニ聖人ノ御一流ヲ再興セント念願ノミ昼夜不斷ナリ、永享三年御歳十七才ニシテ、青蓮院ニ到ラセラレ、鬢髪ヲ剃除シ玉ヒ、則広橋中納言兼郷卿ヲ養父トシ玉ヒ、公名ヲ中納言兼寿ト号奉ル、ソレヨリ已来、一代ノ聖教ヲ披玉ヒ、師釈ニ御心ヲツクリ玉ヒ、教行信証ノ文類ニ六要鈔ノ御尺ヲ引合、祖師ノ深旨ヲ極メ、巧妙ヲサクリ、要文ヲ抽出玉ヒテ、シカモ愚凡ヲ心安ク導ン為ニ、法門沙汰ナシニ文ト名付テ、御安心ノ一義ヲ一天四海ニ流行シ玉フ、宝徳元年三十五才ノ御時、祖師ノ御旧地ヲ御廻アソバシ、御帰洛シ玉フニ、長祿元年六月十八日ニ御父存如上人ニ御別レ、其后弥々御化導在スニ、流水ノ如諸人帰依シ奉リ、文明十一年ヨリ延徳元年迄、一天四海ニ比類ナク御繁昌アラセラレ、御隱居アラセラル、モ、是ヒトヘニ御身ヲカロク御教化ヲ重ク、一人ナリトモ信心得ヨカシト念願ノミニ思召、深重ノ御慈悲ナリト、可仰

可信モノナリ、南无阿弥陀仏、

蓮如上人山科実記卷下

釋了山謹考記

蓮如上人、延徳元年御歳七十五歳ニナラセラレ、御隠居所ヲ御シツラヒノ思召ニテ、野村ノ東辺御巡見アラセラレ、則八丁四方御領地ノ内、御本堂ヨリ三丁余東、音羽村ニ宜キ勝地アリトテ、則粟津作治良元道・中川勘解由・土橋肥前守・海老名五良左衛門・孫右衛門等、御取持申上、則御隠居ノ御殿・御庭ニ泉水・築山ヲキツカセラレ、土手ヲ高ク堀ヲ深く、一丁四方ソト講、二丁四方ニ御カコヒアソバサレ、其年ノ春ノ頃ヨリ八月上旬迄ニ、御成就アラセラレシトナリ、是処ハ、風景甚タ宜ク、先東ニ音羽山（京清水ノ奥院田村丸建立ノ寺）、是山ニツ、ヒテ大宅山醜鞠山（慈現大師ノ開基ナリ）、東北ニ五輪山・三井寺山、西ハ花山・稻荷山・清閑寺山、北ハ御陵山、南ハ勸修寺山・黄バク山・宇治等、四方ノ風景甚タ宜キトテ、御喜ヒアソハサレ、其年八月廿八日御日中后、泉水ノ御殿へ入セラレ、其時、御近達様・御一家中・御家老中・御門徒中、御機嫌窺ニ上リケレハ、其時ノ仰ニ、功成名遂テ身退ハ是天ノ道ト云ナリ、故二人ノ詞モ今身ニ思ヒ知レテ侍リ、ハヤ世ヲ遁レテ心口安シ、イヨ／＼仏法三昧タルヘシト（右御言、御一代聞書ニアリ）、各々歡喜セラレケルトカヤ、サテ、御近達様・御家老中・御門徒中、御殿・泉水・築山ノ風景思ヒノホカノ結構ナル事、語言ニ絶テ思外ナリト申玉ヒハ、蓮如上人ノ仰ニ、思ヒタヨリ大キニ違フト云ハ、極楽へ参リテノコトナルヘシ、コ、テ有難ヤ尊ト思フハ、物ノ数ニテナキナリ、彼土へ生レテノ歡喜ハコトノハモ有へカラスト、南殿山水ノ御縁ニテ仰候ト（実悟覺書



二有、時二、是御隱居所ヲ南殿ト申其謂以何と云ニ、実如上人ノ在御殿を北殿ト申故ニ、御隱居所ノ御殿ヲ南殿ト申ナリ、然ラハ問、其時ノ御本山ハ西ニ当リ、御隱宅ハ東ニ当ル、何故ニ南殿・北殿ト申ヤ、答、是ハ古例ナリ、古ハ大谷ニ覚如上人ト唯善坊ト伯父・甥同居シ玉ヒケル、覚如上人ノ居室北ニアル、唯善坊ノ居房南ニアル故ニ、北殿・南殿ト申セシナリ、是ノ古例ヲ以、於山科東西ニ方角ハ当レとも、御当職ノ実如様ノ御殿ヲ北殿ト申シ、蓮如上人ノ御殿ヲ南殿ト申セシナリ、近クハ唯今、御本山ノ公様ノ在ス御殿ハ、御本殿ヨリ西ニ当リテアレとも、是則古例ヲ守リテ、西ニ当ル御殿ヲ南御殿ト申ナリ、

一、南殿ニテ御隱居ノ砌リ、御製作ノ御文四帖目第九通疫病ノ御文、延徳四年六月ナリ、其年其月年号改明応トナル、延徳元年ヨリ明応五年迄ニ五帖目ノ御文ヲ多ク御製作ト申伝ルナリ、明応五年正月二日ニ蓮如上人、ツラク古ハ大谷ニ於テ五十余年ノ間御化導、山科ニテ十一年ノ間御住職ニテ、益々御繁昌、今ハ御隱居ヨリ八年目ナリ、八十五才ノ御老年、唯往生ヲ待計リナリトテ、正月二日ノ御筆始ニ、法印權大僧都大和尚位兼壽、ト御自身ノ御官職ノ御名ヲ御直筆、右ノ方ニ、昔ハ在東山靈地雖モ、立開山ノ宗儀、今トテ山科林窓ヲ偏ニ、忻安養、往詣ヲト、左ノ方ニハ、末代衆生ノ御形見ニ、

我なくはたれもこゝろをひとむきに弥陀をたのみて後生たすかれ と

明応五年〈丙辰〉正月二日ト、右ノ御形見、南殿泉水山ノ御旧地光照寺ニ有リ、其年大坂へ御下向〈天王寺御参詣、太子ノ御告ニ依テ大坂御坊御建立ノ事ハ、諸記ニ有リ、略ス、生玉ノ庄内へ御建立、明応第五秋下旬ノ頃ヨリナリ、同年十一月上旬ニ、大坂ヨリ山科へ御カイリ、報恩講於山科御執行ナリ、則チ当所山科ノ村ニイカナ

ル因縁ノアリケルニヤノ御文、御直筆、則光照寺ニアリ（右ノ御文、慶安年中盜難ニアヒ盜レタリ、其後一如上人御直筆ヲ願御免、然ルニ又寛政元年ニ盜レタリ、残念ナル事ナリ）

一、延徳二年ノ報恩講七昼夜ノ砌リハ、將軍義尚公江州へ進発有リ、諸宗仏事ヲ慎ト雖とも、山科御本廟幾万億ノ参詣ナレハ、法敬坊・慶敬坊ヲ以、勤行御執行ナキ由、仰触サセラレ、諸人ヲ帰サセラレテ、南殿ニテ御執行有レハ、忽數千万人ノ参詣トナリ、諸人歡喜スル事カキリ无トアリ、同年夏ノ頃、御語ニ、我ハ身ヲ捨テタリ、上段ノ除テ平座ニシテ、諸人ニ一首ノ和讃ナント聞セテ信ヲ得ヨカシト、嚴冬ノ寒天ニモ、九夏ノ三伏ノ暑キ夜モ、蚊ノ多キニモ、責ラレテモ、堪忍シテ宵ヨリ枕ヲカタムケル事モナシ、唯仏法方ノ事ヲタシナミ、後生ノ一大事ヲ心ニ思イレ、一人ナリトモ信ヲ得ヨカシト念願ナリト（実悟覚書ニアリ）

延徳三年ニ尾張ノ巧念上リケレハ、南殿ノ御縁ニテ御教化アリ、河野九門徒ヲ取立シヨ御ホメアラセラレタリ（実悟記ニアリ）○（是巧念ノトリ立タルハ、今尾州・濃州ノ堺ニアル河野六坊也）

一、延徳元年御隠居ノ砌リ、井戸ヲ堀ヘシト仰アリ、其時在所ノ人々申上ル、当地ニ井ヲ堀候テモ水ハ无御座、依之、二三丁先竹鼻領ノ澤ノ水ヲ使候、其故ハ、往昔行基菩薩ノ御修行ノ砌リ、水ヲ乞玉フニ、水ヲ上ケス、依之、行基水ヲフウジ玉フト申伝ヘ候、夫故カ何程井戸ヲ堀候ヘテモ、水出不申ト申上ケレハ、蓮如上人、不苦、可堀ト仰ラル、仰ニ順ヒホリケレハ、蓮如上人、御成被成テ、御技ヲツカセラレテ仰ニ、行基ト在所ト故障アリとも、蓮如ト行基トシサイナシトノ玉フト、頓テ水流々タリ（是事山科連署記ニアリ、今ハ略スルナリ）（右ノ井戸、光照寺屋敷ノ内ニアリ、在所甘軒程ミナ是水ヲ呑）

南殿泉水ノ御庭ノ水ハ、音羽川より竄ニテ伝テトリ玉フトナリ、音羽山ヨリ流ル、水、平生ハ余程ノ水ナレとも、是在所へ流レイルト、大地へ水自然ト引ナリ、其水、京都東山ノ峯ニ池有リ、其池へ湧出テ、清水ノ瀧トナルへ此事古キ書ニアリ、今ハ略ス、（是事、先年、歆喜光院様、御成ノ砌、当御坊御留主居ヨリ申上ケレハ、御逗留ノ砌、音羽山へ御成リ、山上ヨリ流ル、布引瀧トナツテ流レテ、音羽ノ在所迄流レテ、其水、大地ニ入ル迄御見物アリシナリ）

一、勸修村道徳禪門、年頭ノ御礼ニ上リケレハ、蓮如上人、道徳ノ年ヲ御聞アソバサレテ、自力他力ノ念仏ノ御教化、明応年中ナレハ南殿ニテノ事ナリへ右道徳ノ跡、今ノ勸修寺村西念寺是ナリ、

一、明応第五ノ秋下旬ノ頃ヨリ明応七年極月差入迄ハ、三ヶ年大坂御逗留ナリ、是間、度々山科南殿ト大坂ト兼テ御座ラセラレタリ、其内大坂カ主ナリ、

明応七年二月廿五日、毎月兩度寄合ノ御文、同年四月十一日ニ、夫秋サリ春サリノ御文、夏ノ御文ハ同年五月下旬ニ通、六月中旬一通、七月中旬一通、右四通、夏中御製作ナリ、同年十一月報恩講、於大坂御執行、大坂御建立ノ御文カ、大坂御坊ニテ最後ノ御文ナリ、然ルニ其御文、当年寒中ニハ必ス往生ノ本懐ヲ遂ルト御意アラセラレシ故ニ、誠ニ山科ニテ実如上人驚キ玉ヒテ、極月朔日ニ御出向、三番村浄賢ノ所迄御下向、蓮如上人、大坂御出立アソハサレ、浄賢ノ宅ニ入セラレ、先御機嫌ノ御尊顔ヲ拜シ玉ヒテ、実如上人大キニ御喜被遊ケレハ、蓮如上人仰ニ、一流安心ハ文ニクワシク申シ顯セリ、門徒中へモ文ノ通ニ伝ヘラレヨ、是遺言ナリト仰ラレ候へ御一代聞書ニ有、誠、蓮如上人生死元常ノセツナル事ヲ思召、山科迄御帰リナキ先ニ、途中ニテ御遺言御慈悲ノ極

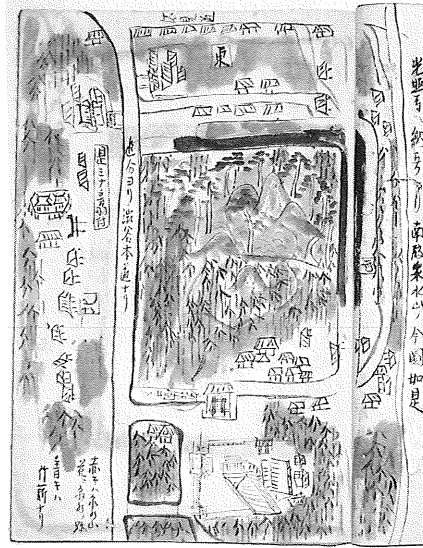
リナリ、三番浄賢ノ所ヲ御出立アソハサレ、山科へ御還リ、御本堂・御影堂へ御拝礼在テ、南殿へ入ラセラレケレハ、御近達様・御家老中・御門徒、御機嫌窺ニ上ル、誠ニ寒中ニハ必ス往生ノ本懐ヲ遂ル定一定ト思ヘリトノ、於大坂ノ御教化ナレハ、扱ハ往生ノ期モ御近付ト涙諸トモニ御尊顔ヲ拝ス、然ルニ蓮如上人、

八十五定業極るこの身かな明応八年往生そすれ、

ト御詠歌アソバサレタリ、サテハ諸国御末寺御門徒、我モノト山科ニ集リ、極月ノ世話敷モ打忘レテ、御尊顔ヲ拝シ納メ、御教化ノ聴聞納ナリト、御本廟ニモ南殿ニモ充滿ス、然ルニ南殿ニテ極月八日ニ、五帖目ノ当流安心ノ一義と云ハタ、南无阿弥陀仏ノ六字ノコ、ロナリノ御文御製作、右ノ御文ノ奥書ニ明応七年極月上旬第八日、極楽へ我行なりと聞ならはいそきてみたをたのめみな人、

ト一首ノ御詠歌アソバサレシナリ、右ノ御文へ実如上人御直筆ニテ泉水山南殿光照寺ニ有リ、蓮如上人御文御製作ノ最ナリ、是御文、善導ノ御尺、釋尊出世本懐ヲ顕シ玉フ御文ナリ、

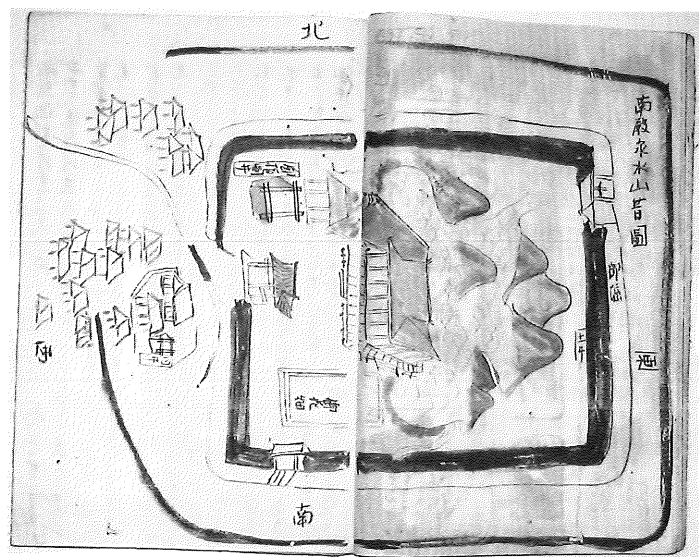
一、明応五年ニ、常陸国小嶋御旧地、下間三月寺ノ開基蓮位房ヨリ七代目蓮存坊、上落シ南殿へ上リ、御教化ヲ蒙リ歡喜スル、則改解文ノ御法話アラセラレシト也、蓮存心中ニ徹シ、御形身ニ御自画ノ御影ヲ願フ、蓮如上人、其方先祖蓮位房へモ祖師聖人ノ御形見数々アリ、予モ老年ニ及、形見ヲ參ラセントテ、泉水ノ水ノ澄メルニ御姿ヲ御ランゼラレテ、御自画アラセラレタリ、蓮存泪ニカキクレ、何卒唯今ノ御教化、改解文ノ下サルヘシト願上レハ、右ノ御影ノ御讚ニ、改解文ヲ御直筆アソバサレテ下サリケル、今其御影、御家老粟津家ヨリ三月寺へ所望アサセラレ、光照寺へ納玉フナリ、南殿泉水山ノ今図如是、【図3・4】



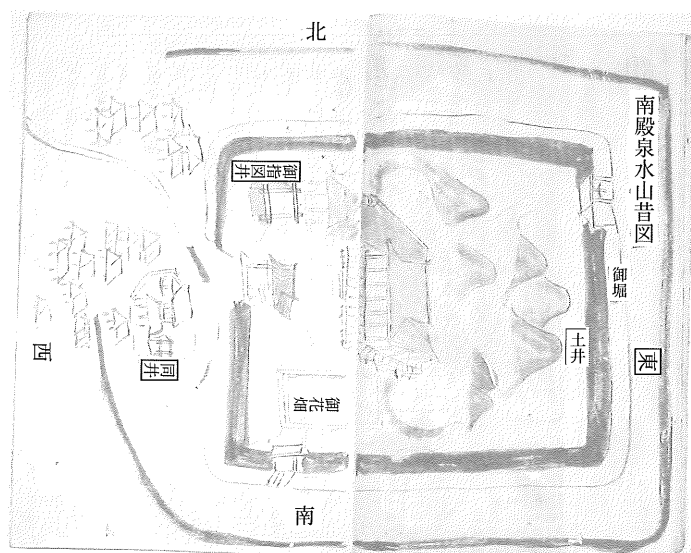
【图3】 [文政南殿絵図]



【图3】 [文政南殿絵図] (文字翻刻)



【图4】 [推定南殿昔图]



【图4】 [推定南殿昔图] (文字翻刻)

問、三百年已来ノ事ヲ何ニ依テ知ルヤ、答、先昔ハ音羽山ヨリ流ル、川、在所ノ北ヲ流レタリ、今ハ南ヲ流ル、ナリ、是事ハ古キ書物ニアリト、今野村ニ、実如上人ノ御塚ノ在ル辺リ迄ハ音羽ノ地ナリ、先年野村ト公事シ、武辺ニ相成テ、音羽川ヲ堺ニシテ野村ヘトラレタリ、然レとも、昔シ音羽川北ヲ流レ、アマツサヘ在所ノ火葬場則其辺リナリ、依テ川ノ向野村ノ内ニ、音羽領在テ、今ニ火葬場ナリ、在所ハ御殿ノ西ニアリシ事ハ古キ書物ニアリ、又初ノ図ノ如ク今ニ歴然タリ、依テ如是ナル事明ナリ、先御花畑ト申ハ、右ノ処ニ今ニ字残レリ、今ノ光照寺ノ辺リヲ御外構ト字ニ申ナリ、又御殿在所ノ方ヘ向キシヲ知ルハ、御指図ノ井戸ノ様ス、扱在所ノ方ヘ立向玉フ、則野村御本廟ト東西ナリ、御真影様ヲウシロニアソバサル謂レ无、惣して是辺ヨリ八丁四方、西中路ト申セシナリ、殊ニ御所ヨリ二百石ノ御朱印ノ地ノ内ナリ、然ルニ証如上人ノ御代ニハ、越中五十万石ノ御領地トナリ、其后大坂御本山ノ砌ハ、加賀国・能登ノ国ニテ五十万石、合せて百万石ミナ御領地ナリ、殊ニ山科ハ敵ノ為ニ焼失アラセラレ、焼野ノ原トナレハ、其アト御カマヒナシ、殊ニ信長進発ノ砌リ、一日一夜ニ江州ノ大主佐々木ヲ亡シ、京ニハビコル三宅日向守・松永彈正ヲ追散シ、先山科ニ乱入、我レニ順ガハサルヲ切殺シ、足利將軍ヲ我儘ニシ、御本料ノ内ヲモ種々ニ我儘シ、七ヶ郷ノ山科ヲ十七ヶ郷ニ地ヲ分タリ、其時ノ、サヲノ打加減ニ依テ、村々領分種々ニ分レタリ、其セツノ御門徒ノ中ニモ不信心ノ人々ハミナ改宗セリ、然レとも海老名・土橋・粟津・中川等、是等ノ人々信心ケンゴニシテサラニ改宗セス、故ニ海老名ノ隱居所、西宗寺トナツテ、在所六七十軒ミナ西宗寺ノ門徒ナリ、又粟津ノ跡、唯今光照寺ト成テ、在所六十余軒ミナ光照寺門徒ナリ（是粟津氏ハ、蓮如上人御代ニハ南殿御外構ノ中ニ居住ナリ、故ニ今ニ然ナリ）、中川ノ跡、唯今明教寺ト成テ在所（小山村）四十軒余ミナ門徒ナリ、野村本郷土

橋ノ隠居所、真光寺ト成テ歴然タリ、可知、

扱、信長、大宅村ニハ真筆ヲ以テ、山科ノ山不残无年貢可為トノ書付ヲ残セリ、誠ニ信長ノ時代ニ多他宗ニナレリ、問曰、蓮如上人ノ御法語ニ、音羽村と云事ナシ以何、答フ、近ク喩ヲ以云ハ、唯今東西ノ御本山、日本国中ニ於テ京都六条様ノト申ナリ、是レ六条ノ内ニ町名数々アリ、中ニモ東御本山ハ烏丸通りニ在ル故ニ、年代記ナドニハ烏丸本願寺トアリ、又西本山ハ堀川通ニアタル故ニ、堀川本願寺ト申ナリ、其堀川・烏丸ニテ八丁四方御領地ナレバ、喩ヘ町名何程アリとも、夫レニハ御カマヒナシ、ミナ六条ノ内烏丸・堀川ノ御領地ナリ、故ニ六条ニテ殊タルナリ、ステニ六波羅御所ハ清盛公ノ御殿ナリ、然ルニ六七百年モ歴タレハ、町名種々ニ別レテイロノニ替ルナリ、八坂ノ法観寺ハ聖徳太子御建立ノ七堂伽藍ノ靈地ナレとも、唯今五重ノ塔計残リテ靈山高台寺其外イロノニ名分レタリ、今於山科、野村トノ玉フ、山科郷ニ於テモ、在所殊ニ野村ニ御本廟御建立ニテ八丁四方ノ内ナリ、アマツサヘニ百石ノ御朱印ノ内ナレハ、外ノ小名ハ不仰ミナ野村本願寺ノ領地ナレバナリ、故ニ唯北殿・南殿ニテ事タルナリ、三百年已来ニマチノナレとも、今ニ泉水山歴然タリ、又御指図井戸・御花畑・御外ガコイト地銘ニ残レリ、能々可考、

緒又、南殿ノ四方ニ土井アリシ事ハ、音羽村粟津十右衛門ノ屋敷、唯今ノ家ノアル所ヨリ八間程東ニ、外カマヒノ土井九十年已前迄アリ、是土井ニテ音羽川ノ満水ノ時水ヲヨケタリ、其土井ノ東山テニ、音羽ノ新田、小山村ト申して二百年已前ニ分レテアリ、其小山村トノ間、七丁ノ内、人家ナシ、一面ノ河原ニテ、其河原今ニ三丁ニ三十軒程残テアリ、



扱又、南殿泉水山ノ内、半丁余築山・泉水アツテ、七八十年已前迄ハ、彼泉水ノ中ヲ、子供タライニ乗テ、夏ノ時分水アソビセシナリ、然ルニ六十年已前、山ヲクツシ、土井ヲ引平ケ、竹薪ニセシナリ（是ニハ甚タノ分ノ有事ナリ、指合アル故ニ略ス）、其竹薪ノ中ニ山一ツ残り、泉水ノ跡モアルナリ、然レとも残テ半丁ノ内ハ、今ニ図ノ如ニ築山・泉水歴然タリ、右ノ内ハ、六条御家老栗津ノ所持ナリ（唯今ハ御本山ノ御所持ニナレリ）、

一、蓮如上人、明応七年極月大坂ヨリ南殿へ御歸リ在テ、御詠歌

△八十五定業キハマルコノ身カナ明応八年往生ソスル

△身ハコ、ニカクレイルトモ本願ノヲトハアマ子ク響キコソスレ

△極樂へ我ユクナリトキクナラバイソキテ弥陀ヲタノメミナ人

右ノ三首ノ中ノ御歌ニカクレイルト隠居ニ字ヲヨマセラレ、ヲトワト御仮名ナレとも、音羽ノ村名ヲ本願ノ音ハ名号、名号ノ謂レハ御文ノ御教化ナルヘシト申スナリ（右ノ御真筆、中川ノ住物タリシトナリ、然ルニ慶長年中、出火ニテ焼失セリト申伝ルナリ）、今コ、ニ、チナミニ顯ス畢（御真筆ナケレハ証拠ニハセヌナリ）、

一、蓮如上人ノ御時代ニハ、トリワケ毎月廿八日ト廿五日ヲ御大切ニ御寄談ノ法語ヲアラセラレシトナリ、則毎月兩度寄合ノ御文明也、文明十九年ニ法然上人ヨリ御夢想アリ、其時則チ蓮如上人ノ御直筆ヲ以テ、法然上人墨染ノ御影ヲ画セラレ、御自讚ニ善導大師ノ、一心専念ノ文ヲ左ノ方ヨリ右ノ方ヘ書セラレ、御筆止ニ、仏願故ノ故ノ一字ヲ別ニ合テ書セラレタリ（右ノ法然上人ヨリ夢ノ御告ノ事ハ、実悟覚書ニアリ、右ノ御物語語兩殿ニテアソハバサセラレタリト）

〔右ノ御影越前東光坊と云ニ有〕

一、蓮如上人、明応八年春ノ頃、御近達様方・其外御門徒中、南殿へ上リケレハ、実如上人仰ラレ候、サテハ御往生近クナラセラレ候アヒタ、御ラレ候事ハ何事モ金言ナルソ、大切ニ可奏聞ト仰アリレハ、人々心中ヲ何トカアツカヒ申サント申ケレハ、蓮如上人ノ御仰ニ、一心ニ弥陀ヲ疑ナクタクタノムハカリニテ、往生ハ仏ノ方ヨリ定マシマス、其証ハ南无阿弥陀仏ヨ、此上ハ何事ヲカアツカフヘキソト仰ラレ候、

又時々ノ仰ニ、乞食ノ沙門ハ鶯珠ヲ死後ニアラワス、賊縛ノ比丘ハ草繁ヲ遊ニ脱スト、是ハ御往生ノ后ニ、奇瑞不思議ヲ顕ワサルヘキトノ仰事ナリト、

三月朔日ニハ、南殿泉水ノ四方ノ土井ヲ御興ニ召テ四方ノ風景ヲ御ランアソハサレ、是ノ南殿御隠居ノ御殿ヨリ、御興ナカラ北殿御本廟ノ土井ノ上ヲ御興ヲカキ上廻リケレハ、甚タ面目シト、御喜ヒアソハサレタリト、御興ノカキテハ、下間丹後法橋・同弟上野助・其外奉輩カワルくト、

三月三日ニハ、桜ノ花ヲ御覧セラレタキヨシ仰セラレケレハ、空善坊、芳野ヨリ桜ヲ持參シテ北ノ御庭へ植オキケレハ、蓮如上人御覧有テ、御詠歌アソハサセラレシト、

△サキツ、ク花見度ニ猶モマタ唯願ワシキ西ノ彼岸

△老楽ノイツマテカクハ病ヌヘシ迎ヘ玉ヘヤシミノ浄土ヘ

其日ハ御機嫌宜クワタラセ玉フトナリ、

三月七日ノ暁方ニ、御テツカラ御脉ヲ御ランゼラレ、チガフ所アリト仰ラレ、藤左衛門何某と云医者召テ、脉ヲ

ウカゞハセ玉フニ、胃ノ氣ノ御脉ニ違フ処候ト申上ル、夫ヨリ御影堂へ御暇乞ニ參ルヘシトテ、御輿ニ召乘玉ヘ  
〈輿ノカキテハ下間兄弟ナリト〉、御内陣へ御入アソハサレ、其時御木像様へ御拝礼在テ、高声ニ、極樂へ參ル  
御暇乞ニテ候、必ス極樂マテ御目ニ掛リ申ヘク候、南无阿弥陀仏く、ト御申アリケレハ、御暇乞ニ參リシ数千万  
ノ御末寺・御門徒一同ニ涙ヲ流シ、貴敬限リナシト、夫ヨリ御輿ヲカキ上、御殿へ入ラセラレ、種々ノ御物語有  
リト〈実悟覺書ニアリ〉、

又、空善御窺ニ上リケレハ、御仰ニ、鶯ノ声ニナクサミケリ、法キケト鳴ナリ、鳥類タニモ法聞トナクニマシテ  
人間トナリ、殊ニ聖人ノ御弟子トナリ、法ヲ聞サルハ浅間敷ト仰ラレ候、

一、御臨終近クナラセケレハ、御枕ノ方ニ押板ニ、祖師聖人ノ御影ヲカケサセ玉ヒ、拝礼アソバサレ、頭北面西ニ  
御ヤスマアソハサレテ、御自愛ノ栗毛ノ馬ヲ御覽セラレタキ御仰アリ、依テ疊ニ疊上テ、馬ヲ御目通ヘ出スニ、  
馬前足ヲ打、玉ノ如ノ涙ヲ流シテ頭ヲ下ケテナキケルトアリ、〈御一代聞書ニ有〉

△三月廿五日曉方、世界ホガラカニシテ、日輪頻リニマワリ玉フトアリ、正九ツトキ、又日輪廻リ玉フニ、正九  
時御寝リ給フ如ク、无病无惱ニシテ念仏ノ御息タヘ在シケリ、御蓮子・御近達・御寺内・御寺外ノ道俗男女、  
ナキ伏シタヲレテ称名念仏セリト、

△廿五日曉方ヨリ、山中・郷中ノ御地震動セル事シキリナリ、誠ニ権者明迹ノ入滅ノ砌リハ、大地震動スル、其  
例釋尊ノ御在世ヨリ多シ〈今ハ略〉、

廿五日午尅ニハ、山科郷中ノ草木ノ葉ノ立タル迄モ、遍クシホレタリ、別シテ御寺内八丁四方ノ内、中ニモ南殿・

北殿ノ前後ニ在、古ノ草木ノ枝迄カタムキタヲレタリト、誠ニ不思議ナリ、

廿五日朝日中夕時、三度日輪廻リ玉フト也、虚空ニ五色ノ雲タナビキ、蓮華フル事、雪ノフルカ如ナリ（是事御一代記ニアリ）、

一、廿八日ニ御尊骸ヲ曲祿ニ乗セ奉リ、諸人拜礼御免アルニ、御尊顔常ヨリモ尚ウルハシク、誠ニ御開山ト同シ事ニ拜シ玉フトナリ、（則念珠助老ヲツカセ奉リ、御影堂ノ南ノ方ニ御ナヲシ奉リ玉フト也、是ヨリ御代々御往生ノ后、御尊骸ヲ諸人ニ拜礼御免トアルナリ）、

一、御葬送ノ時ハ、別して虚空一面ニ紫雲五色ニキラメキ、蓮花ノ大サ一尺余リナルカフリ下ル、是時、大坂石山御坊ノ御堂ノ上ニフリシ蓮花、大サ二尺余トアリ、常ナラヌ路念仏ノ声スミワタリ、裏門より外地内ヲ北へ回り、二丁程ノ内行烈ニテ、空花ノ香、路念仏ノ声、数万人ナキ伏シタヲレテ、前后正体ナキトナリ、荼毘シ奉ル一片ノ煙ノ中ニ、白鷺充滿シテ舞遊、白蛇煙ノ中ヲ飛廻ル、是来生ノ便リトスル心ヤ、又ハ愁歎ノ心ナルカト、人々申セシトナリ、カ、ル不思議ヲ拜スル他門ノ道俗、我ヲワステ泪トトモニ念仏セリト、又禁裏御所ノ御廟所泉涌寺ノ僧衆十余人、山へ登リ山科ノ不思議ヲ見テ目ヲ驚シ、サテく権者明迹ノ往生ナリ、長老ノ曰、彼ノ宗門ノ開山親鸞聖人ノ再タンナリトテ、蓮如上人ヲ執シ申サレシトナリ、御往生ノ後、一七日ノ間、空花フリシトナリ、誠ニ応永年中ヨリ明応八年迄ノ御化導、愚筆ニ難盡、謹テ奉窺ニ、文明十年春ノ頃ヨリ思召ケルハ、当寺ハ是忝モ亀山院・伏見院両帝ヨリノ勅願所ノ宣旨ヲ蒙テ、サラニ私无シ、然ルニ是浄土真宗再興ニ付テ、諸宗ノ偏執ヲ受、先師ノ御代迄相続セシ大谷ノ御本廟空ク山門ノ為メニ焼レ、宗祖ノ御真影ヲ聖道門ノ内ニアツケ奉リ、

我身一ツ諸方経廻シテ、本寺ノ勅願所ヲ失事、本意ニアラスト、頻ニ建立ノ御志願在テ、ステニ其御企ヲナシ玉フ、忽ニ文明十二年ニ山科ニ建立成就在ス、誠ニ久敷、都鄙ニ御心ヲ盡シ玉フモ、一度法流ヲ再興シ、一字ヲモ結ビ諸国門葉ノノ類心安、参詣ヲ致シ、念仏修行セシメ玉ハント思召ケルニ、御心ノ如ク成就在シ、聖人ノ一流、日本六十余州ニ残處モナク門葉刹那ニ充滿セリ、仏法弘通ノ御本懐、衆生御利益ノ宿念、忽ニアラハレ玉フ、誠ニ黒谷聖人ノ化現トモ謂、又祖師ノ御後身とも称ス、実ニ知レヌ、

実如上人へ御代ヲ御譲リアソハサレシハ、本願寺ニ於テ御隠居シ玉フハ、唯蓮如上人計ナリ、是偏ニ御表向ノ御勤ヲノカレ玉ヒテ、南殿ニ世ヲノカレテ、唯无漏ノ燈燭ヲカ、ケン為ナリ、宜哉、大坂ニ御下向在テ、皇太子ノ御案内ニ依テ、八百余年ノ内カンレイ子シノ宿報ヲ顕シ、石山ニ御坊ヲ建立シ玉フモ、濁世ノ迷闇ノ愚凡ヲ導引シ玉ハン為ナリ、仰キ帰敬シ奉ルヘキナリ、

一、御往生ノ后、南殿へ実如上人御成アソハサレ、念仏勤行アラセラレシトナリ（蓮如上人延徳元年御隠居ノ砌リノ御直筆ニテ、一貫代ノ三方正面ノ御本尊是南殿御内仏ナリ、今ハ光照寺ニ在リ）、右ノ御殿へ毎月廿五日（正信偈六首引）・五日（蓮祐禪尼ノ御命日ナリ）、勤行御声調、正信偈三首和讃ナリ、御祥月ニハ、御迨夜・日中兩日御成、御一家衆二人・御堂衆二人御供ニテ、五日ニハ正信偈舌々ノ御勤行ナリト、正月十五日ノ間ハ、北殿・南殿三丁半ノ道（西中小路ト申ナリ）、御末寺・御門徒、数万入御礼ニ上リシトナリ、御往生ノ后、御十七廻忌ニ御法事御執行ニ付テ、南殿泉水ヲ半分程埋メ玉ヒテ、持仏堂ヲ御建立アソハサレ、堂五間四面、屋根ハコケラズキ、其時、御本尊ヲ興正寺門徒ヨリ御寄進奉（其トキ興正寺門徒と云ハ、今ノ西宗寺ノ先祖、老海名カ、又ハ

土橋肥前守真光寺ノ先祖カ、是人々モトハ仏光寺門徒ナリシカ、彼興正寺殿ニ付テ来タリ、故ニ今兩寺興正寺ノ末寺ナリ（※右傍「付テ来ルナリ」）、故ニ西宗寺・真光寺、今則興正寺御門跡様ノ末寺ナリ、

則、御建立ノ持仏堂ノ本尊、右等ノ門徒中ヨリ上ラル、トナリ、其御本尊今（泉水山光照寺ノ本尊ナリ）、

一、右ノ方ニハ、蓮如上人御自画ノ御影ヲ掛給ヒ、左ノ方ニハ実如上人御自画ノ蓮祐禪尼ノ御影ヲ掛奉リ、御本尊ノ御厨子金戸ヒラニテ結講ナリ、持仏堂ノ屋根ハコケラフキニテ、アツサ四寸五分ナリ、此堂ヲ行道堂トモ名付クト、実悟尊老、予廿五才ノ時ナリト（直筆ノ覚書ニアリ）、

実如上人御一代、御別条ナク御繁昌ニテ、大永五（乙酉）二月二日、御年六十八歳ニテ御往生ナリ、御墓ハ音羽泉水山光照寺堂ノ正南二丁程先ニアリ、

一、実如上人ニ五人ノ御息アリ、

○第一、光円、公名中納言、法名照如ト号、早世シ玉フ、

○第二、光融、法名円如、偏増院ト号、

○第三、兼珍、本徳寺ト号、法名実玄、

○第四、兼證、法印権大僧都、法名実円、本宗寺ト号、

○第五ハ女子ニテ、光敬寺兼順ノ内室トナリ玉フ、法名妙祐ト号、

○第一男光円公ハ、実如上人ニ先達テ往生、故ニ第二男円如上人、則別当職ノ御讓ヲ受玉フ、則実如上人ヨリ御文御集録ノ命ヲ蒙リ玉ヒテ、南殿ヘ入ラセラレ、御文ヲ御集録アラセラレ、大永元（辛巳）七月頃迄ニ、八十

余通五帖一部トアソバサセラレ、同年八月廿日ニ御年三十三才御往生、誠ニ御文御選集ノミニ顯シ玉フ善知識ナリト人々申上ル（東西ノ御本山ニ於テモ、右円如上人御祥月ニハ毎年御影掛ラレ、御事務職ト同事ニ御法事有也）、則南殿ニテ御往生ナリ、故ニ御葬礼ハ南殿ヨリ七丁程東、露山ノ麓ヘ荼毘シ奉ル、此辺リハ、揚徳院尼公ノ御隱居ナリ、今ノ小山村明休寺、慶安年中ニ其円如上人荼毘ノ地ニ建立ナリ（西派）、是辺リニ円如上人ノ御墓アリ、

○円如上人ニ二子在ス、第一男、光教、法名証如、童名光仙、后ニ光養丸ト号、第二ハ女子、本泉寺兼興ノ内室トナリ玉フ、右ノ証如上人ニ御世ヲ譲リ玉ヒ、第十代ノ御住職トナラセラレ、則証如上人ヨリ始テ九條閑白尚經公ノ御猶子トナラセラレ、法印大僧都ト成セ玉フ、是則、往昔月輪禪定殿下ノ祖師ノ先蹤ヲ追玉フ故也、

一、実如上人往生ノ時ハ、証如上人十歳ニテオハシ在ケルナリ、是上人ノ御時代ニ、御本山御威勢サカンニナラセラレ、御家中多ク、御末寺・御門徒ニモヨリ／＼合戦アリ、賀州・能登・越中三ヶ国、百万石ノ御領地トナリ、先代未聞ナリ、諸国諸大名モ御本山ノ御勢ニ恐レシトナリ、然ルニ悲哉ヤ、下間筑前・下間源七・八木藏人等ノ諍論ニテ戦ヒ出来、享祿三（庚寅）年、後奈良院ノ御宇（天文元年壬辰年八月廿四日トモアリ）、下間源七郎ノ悪心発リ、他派ノ僧衆ト同心シテ、北殿・南殿一時ノ間ニ焼亡ス、又、北国太平記ニ、佐々木六角弾正ノ焼亡セシトアリ（異説マチ／＼ナリ）、（然レとも、源七郎、他山ノ僧衆ヲカタラヒ、佐々木ト見セテ亡スト云説アタレリ）、誠ニ一時ノ間ニ野原トナリ、其後合戦止事ナシ、西国三好日向守・松永弾正・信長等ノ合戦ニテ、跡方モナキ野原トナル、然とも其御地面・内堀・外堀・泉水・築山・御指図井戸、其外御形見ハ今ニ歴然タリ、唯今ハ

東西ノ御坊御建立在テノ御繁昌ナリ、

右、古ヘヨリノ年代ノ実事ヲ尋子顕シ、御旧地ノ誠ヲ顕シ畢ヌ、是偏ニ、仏恩報謝ノ為ナリ、

一、本願寺東御掛所、蓮如上人六十六歳、山科御建立御満足ノ御木像〈御直作〉、御往生ノ後、御弟子方、御葬礼ノ御骨灰ヲ以テ、ヌリ奉ル骨肉ノ御木像ナリ、

一、本願寺西御掛所、蓮如上人御木像御直作〈平生ハ无シ、三月御祥月・九月報恩講ニ本山より入セラル、ナリ〉、


一、西宗寺、蓮如上人御自画ノ御影、并ニ〈山科御建立御万足ノ御文、御名号、其外略ス〉

一、光照寺、蓮如上人御自画御自讃〈改悔文ノ御讃ナリ〉、南殿御隠居証拠ノ御筆物〈山科御建立御万足ノ御文、御名号、其外略スルナリ〉、

○大津ヨリ順道、追分ヨリ七丁余、伏見階道南西へ来テ、音羽村泉水山南殿光照寺、右光照寺ヨリ二丁南ニ、実

如上人御塚アリ、光照寺ヨリ三丁西北へ行テ東御坊、是ヨリ二丁半南東へ行テ西御坊、是ヨリ一丁西北へ当テ

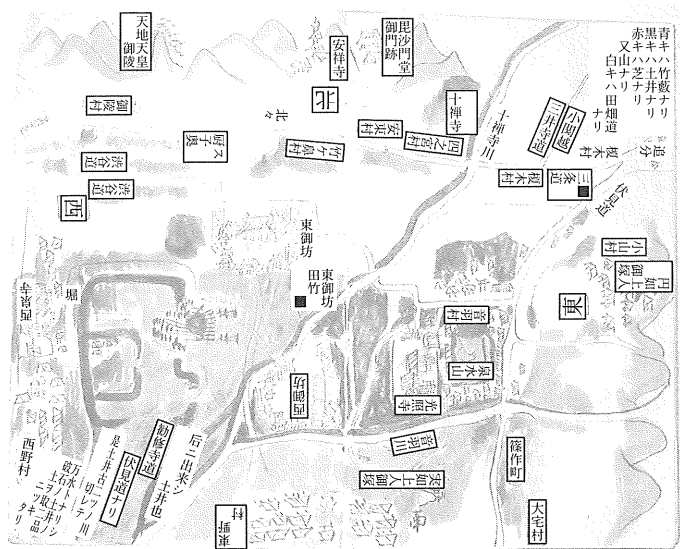
蓮如上人御墓、夫ヨリ三丁余西へ行テ鷲放山西宗寺ナリ、

又、京都よりハ渋谷道来テ、西宗寺ヨリ次第二順路ナリ、【5】





【図5】 [文政山科全体絵図]



【図5】 [文政山科全体絵図] (文字翻刻)

文化十四年之頃ヨリ、山科ニテ、蓮如上人様之事、普ク道俗ニ尋ルトイヘトモ、一向不相分故ニ、文政元年之頃ヨリ、他事ナク夢ウツ、ニモ、昔ノ事ヲ見、アラユル書ヲ見、漸々当年成就ス、誤リアラハ御ナヲシヲ奉願畢、

文政三年辰二月

釋了山（花押）

(了)

註

(1) 光照寺住職粟津篤氏のご教示による。記して謝意を表する次第である。光照寺には他にも了山が記したとみられる書物の存在が知られ、検討の必要がある。

\*付記：筆者は「山科本願寺・寺内町を考える市民の会」の活動に関わり、二〇〇四（平成十六）年十月二十四日（日）には同会の第四十七回講演会において、本書の内容を紹介しながら、「近世真宗僧がみた蓮如と山科―『蓮如上人山科実記』をめぐって―」と題する講演をおこなった。備忘のため、記しておきたい。